聖書と説教　　2024 年 9 月 29 日（日）聖霊降臨後第 19 主日

新約聖書 マルコによる福音書 9 章 38 節―50 節（新共同訳）

[38] ヨハネがイエスに言った。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している
者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようとしました。」[39]
イエスは言われた。「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、
そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい。[40] わたしたちに逆らわない者は、わ
たしたちの味方なのである。[41] はっきり言っておく。キリストの弟子だという
理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受け
る。」
[42]「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼
を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。[43] もし片方の
手があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったま
ま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよ
い。[45] もし片方の足があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。
両足がそろったままで地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずか
る方がよい。[47] もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出しなさい。
両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の
国に入る方がよい。[48] 地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。[49]
人は皆、火で塩味を付けられる。[50] 塩は良いものである。だが、塩に塩気がな
くなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を
持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」

説教「名を使う」

本日の福音書は、イエスの名を無断で使って悪霊を追い出している者を、弟子のヨハネが批判して、イエスにそれを報告している場面から始まります。

当時、悪霊追放のわざを行っていたのは、イエスだけではありませんでした。悪霊追放を行う際、力ある人物の名を口にすることもよく行われており、イエスの名を使い、悪霊追放を行う人たちが現れていたのです。

ここには「イエスの名」がいかに大きな力を持っているかが示されています。イエスの名によって、弟子以外の者でも奇跡を行えたのです。名は体（たい）を表すと言われますが、イエスの名によって力あるわざがなされたことは、使徒言行録にもしばしば出てきます（使徒 3:6 など）。

かつてイエスの弟子たちは、同じように悪霊を追い出そうとしたことがありました。おそらくその時もイエスの名が使われたにもかかわらず、弟子たちは悪

霊追放に失敗していました（マルコ 9:18）。しかし、「イエスの名を無断で使った」と弟子のヨハネから非難された、イエスの弟子ではないその人は成功していたのです。

重要なのは、直接の弟子でなくても、イエスの名によって悪霊を追い出すことができる、すなわちイエスの名に大いなる力があるということでしょう。と同時に、直弟子（じきでし）であっても、悪霊追放に失敗することがあるということです。

弟子のヨハネは、自分たちを歓迎しなかったサマリア人の村を「天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」とイエスに提言して、イエスから戒められたこともあり（ルカ 9:54）、激しい性格の持ち主であったことが想像できます。

そのヨハネが、主イエスの名前を勝手に使って悪霊追放をしていた人を見つけたのです。おそらくヨハネは、その人たちが自分たちに従うように促したものの、従って来ないため激しく怒り、その人を厳しく注意したのではないでしょうか。そして、ヨハネはこのことをイエスに報告したのですが、思いも寄らないイエスの返答を、ヨハネは耳にすることになります。

イエスは「やめさせてはならない」と言ったのです。

この出来事からは、民数記 11 章 27 節から 29 節に記されているモーセの話が思い起こされます。そこでは、正規に預言者として認められていない者たちが預言活動をしているのをヨシュアが知り、「わが主モーセよ、やめさせてください」とモーセに言います。それに対してモーセはヨシュアに「ねたむ心を起こしているのか」と問い、それをやめさせてはならないと伝えたのです。

モーセはこう言いました。「わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ」（民数記 11:29）。

モーセは、ヤハウェ（いのちの神）のすべての民が預言者として生きることを肯定して、人間の対等な関係性を示します。

現代においても、周囲から認められ、公に活動するためには「資格」などが大きな力を持つ世の中ですが、それは権威・権力の独占に繋がってしまう側面があるでしょう。

ヨハネはイエスにこう言いました。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようとしました」。

ですがヨハネのこの行為は、「人の救われる体験」を奪ってしまうものでもあるでしょう。悪霊を追い出してもらう本人や家族にとっては、それをしてくれる相手が誰であろうと、イエスやイエスの正規の弟子でなくても、とにかく救われたいという気持ちがあると思います。

ここでのヨハネは、人が救われること、助けられることよりも、自分たちの面子や権限を保つことを優先したと言えるのではないでしょうか。

そしてモーセと同様、イエスもまた、救いのわざを行う権利を持つ者、持たない者という境界線を引くことを否定しました。

ヨハネとのやり取りの中で、イエスは、自分たちの仲間に直接加わらなくても、キリストの精神が行き渡って実践されることが重要だという、寛容な態度を示しました。

さらにイエスはこう言いました。「はっきり言っておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける」。

「キリストの弟子だという理由で」を直訳すると、「あなたがたがキリストのものだという名のもとにおいて」となります。やはり「名前」が強調されているのです。ここにはキリストの名が受け入れられることの祝福と喜びが語られています。「一杯の水」—— それがどんなささやかな表れであっても、キリストの名がその人の中で受け入れられたことを天が祝福し、天が輝くのです。

またイエスは、こうも言いました。「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい」。

「つまずかせる」とは本来、「人の歩く道に罠を仕掛ける、道に障害物を置く」という意味です。「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者」とは、「小さな者を罪に誘う、小さな者を神への道から引き離す者」と言えるでしょう。イエスの眼差しはいつでも「無力な者」「小さな者」へと注がれています。

「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい」。

この聖句が、私が十代の時に読んだある小説の中に引用されていた記憶があります。

それは、空虚な心を持つ女性が、表向きは普通に社会生活を送りながら、陰でコッソリと、知的障害を持つ子供に、小動物の殺し方とその残虐な快感を教えていたという内容の小説でした。

それは、言語では言い尽くせないほどの、本当に罪深い行為ではないでしょうか。

「地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない」（マルコ 9:48）という言葉が、これほどピッタリくるものもないのでは思わされます。

しかし、蛆が尽きることも、火が消えることもないそのような地獄の中でも、そこにはただ絶望のみがあるわけではなく、その上の方には、一筋の救いと希望の光があるのです。

「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」。

これは「主の祈り」における三つ目の祈りです。神の御心が天で行われるように、この地上でも行われるようにしてくださいという祈りです。

私たち人間は、このことを真（しん）に祈り求め続けていくことが必要です。

本日の福音書は「自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい」というイエスの言葉で締めくくられます。

「塩を持つ」という言葉には様々な意味合いが込められていますが、ひとつには「義を持つ」という意味があります。

義とは、偽りの無さ、神との関係における正しさを表す言葉です。

「自分自身の内に塩を持ちなさい」とは「自分自身の内に義を持ちなさい」ということでもあるでしょう。

イエスの御言葉を覚えつつ、私たちは日々、悔い改め、神との正しい関係を生きて行くことができるよう、祈りのうちに共に歩んで行きましょう。

慈しみ深き主イエス・キリストの御名を通して祈ります。

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

旧約聖書 民数記 11 章 4 節―6 節と 10 節―16 節と 24 節―29 節（新共同訳）

[4] 民に加わっていた雑多な他国人は飢えと渇きを訴え、イスラエルの人々も
再び泣き言を言った。「誰か肉を食べさせてくれないものか。[5] エジプトでは魚
をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱やにんにくが忘れられな
い。[6] 今では、わたしたちの唾は干上がり、どこを見回してもマナばかりで、
何もない。」

[10] モーセは、民がどの家族もそれぞれの天幕の入り口で泣き言を言っている
のを聞いた。主が激しく憤られたので、モーセは苦しんだ。[11] モーセは主に言
った。「あなたは、なぜ、僕を苦しめられるのですか。なぜわたしはあなたの
恵みを得ることなく、この民すべてを重荷として負わされねばならないのです
か。[12] わたしがこの民すべてをはらみ、わたしが彼らを生んだのでしょうか。
あなたはわたしに、乳母が乳飲み子を抱くように彼らを胸に抱き、あなたが先
祖に誓われた土地に連れて行けと言われます。[13] この民すべてに食べさせる肉
をどこで見つければよいのでしょうか。彼らはわたしに泣き言を言い、肉を食
べさせよと言うのです。[14] わたし一人では、とてもこの民すべてを負うことは
できません。わたしには重すぎます。[15] どうしてもこのようになさりたいなら、
どうかむしろ、殺してください。あなたの恵みを得ているのであれば、どうか
わたしを苦しみに遭わせないでください。」

[16] 主はモーセに言われた。
「イスラエルの長老たちのうちから、あなたが、民の長老およびその役人とし
て認めうる者を七十人集め、臨在の幕屋に連れて来てあなたの傍らに立たせな
さい。」

[24] モーセは出て行って、主の言葉を民に告げた。彼は民の長老の中から七十
人を集め、幕屋の周りに立たせた。[25] 主は雲のうちにあって降り、モーセに語
られ、モーセに授けられている霊の一部を取って、七十人の長老にも授けられ
た。霊が彼らの上にとどまると、彼らは預言状態になったが、続くことはなか
った。

[26] 宿営に残っていた人が二人あった。一人はエルダド、もう一人はメダドと
いい、長老の中に加えられていたが、まだ幕屋には出かけていなかった。霊が
彼らの上にもとどまり、彼らは宿営で預言状態になった。[27] 一人の若者がモー
セのもとに走って行き、エルダドとメダドが宿営で預言状態になっていると告
げた。[28] 若いころからモーセの従者であったヌンの子ヨシュアは、「わが主モー
セよ、やめさせてください」と言った。[29] モーセは彼に言った。「あなたはわた
しのためを思ってねたむ心を起こしているのか。わたしは、主が霊を授けて、
主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ。」

新約聖書 ヤコブの手紙 5 章 13 節―20 節（新共同訳）

[13] あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。喜んでいる人は、賛美
の歌をうたいなさい。[14] あなたがたの中で病気の人は、教会の長老を招いて、
主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。[15] 信仰に基づく祈り

は、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を
犯したのであれば、主が赦してくださいます。[16] だから、主にいやしていただ
くために、罪を告白し合い、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、
大きな力があり、効果をもたらします。[17] エリヤは、わたしたちと同じような
人間でしたが、雨が降らないようにと熱心に祈ったところ、三年半にわたっ
て地上に雨が降りませんでした。[18] しかし、再び祈ったところ、天から雨が降
り、地は実をみのらせました。
[19] わたしの兄弟たち、あなたがたの中に真理から迷い出た者がいて、だれか
がその人を真理へ連れ戻すならば、[20] 罪人を迷いの道から連れ戻す人は、その
罪人の魂を死から救い出し、多くの罪を覆うことになると、知るべきです。

教会讃美歌 202 番「東の空」1,2,3 節、274 番「神の子の」1,2,4 節、375 番「神の息よ」1,2,4 節、398 番「なにをも惜しまず」1,2,4 節